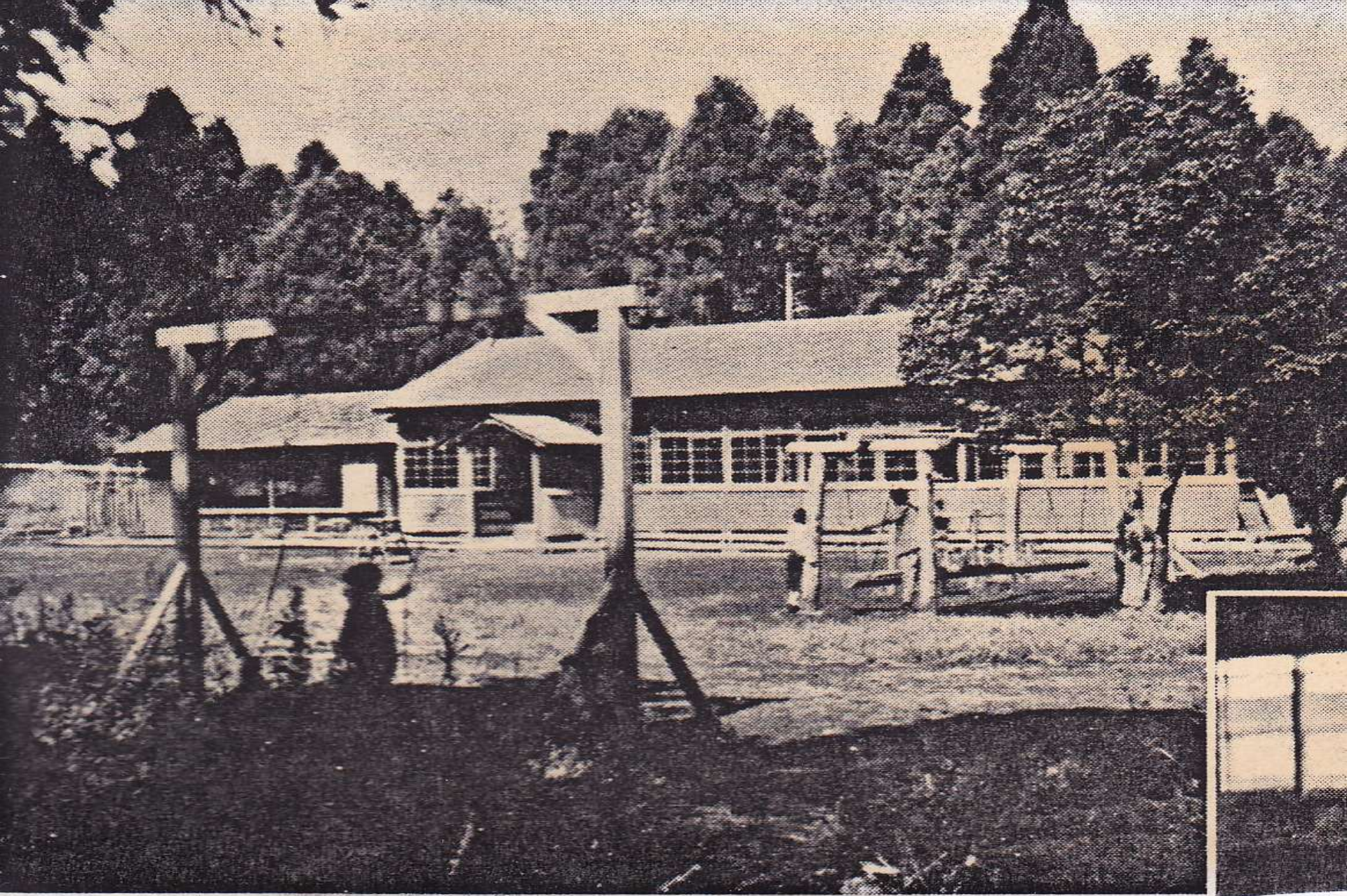


授業分析の到達点と可能性

最終講義(2013年1月31日)

的場正美

名古屋大学大学院教育発達科学研究科



出典:熊本営林局『暖帯林』より

分 教 場 (小林署部内 巢之浦分教場)

講義の概要

- 第1部: 1-1 授業分析に出会うまで
1-2 授業研究のパートナー
- 第2部: 2-1 授業研究の起源
2-2 授業研究の性格
2-3 授業研究の段階
- 第3部: 3-1 授業分析の起源
3-2 授業分析の定義
3-3 授業分析の位置と立場
3-4 授業研究のステップ
3-5 記述言語としての中間項の必要性
- 第4部: 4-1 授業分析の課題と可能性

1-1 授業分析に出会うまで(1)

宮崎大学(河井真:ギリシャ哲学、松尾雄二:ライプ
ニッツ哲学、香川宗明:教育学)

「パウロ・テリッヒの究極的関心」宗教哲学

大阪教育大学(芝野庄大郎:ロバートオーエン研究、
木下繁彌)

シュプランガーの覚醒→「範例方式」

ドイツ哲学→ドイツ教授学

1-1 授業分析に出会うまで(2)

名古屋大学(三枝孝弘、日比裕)

「ドイツ政治教育」、門前の小僧としての
「授業分析」

広島大学:人間教育

九州大学、京都大学の哲学:原典と論理、

東京大学:学問におけるテーマ性

名古屋大学:事例にもとづいた研究

1-2 授業研究のパートナー校(1)

- 額田郡宮崎町立宮崎小学校:授業分析、授業分析の研究実習、卒業論文、博士論文
- 幸田町立坂崎小学校・岡崎市立夏山小学校(豊田文男校長)国際現職研究
- 新城市立東郷東小学校・新城市立新城小学校(渥美利夫校長、杉浦徹教諭、渡辺美代子教諭、杉浦龍子教諭)授業分析、紀要論文
- 新城市立千郷小学校(渡辺富士男校長、夏目真治教諭)生活科の授業研究
- 鳳来町立黄柳野小学校(杉浦龍子校長)教育情報環境の研究、板書と子どもの追求視点
- 新城市立共和小学校・東郷西小学校(杉浦徹教諭)授業分析による授業研究

1-2 授業研究のパートナー校(2)

- 下山町立下山中学校(川合英彦教諭・教頭)授業分析の実習、中学校での座席表
- 岡崎市立恵田小学校(岡田豊校長)参加型授業研究
- 三重県川越町立川越南小学校(宮澤知可子教諭、)生活科・座席表授業案、カルテ
- みえあかりの会(代表:足立敏雄)
- 三重県東員町立笹尾東小学校:イメージと授業

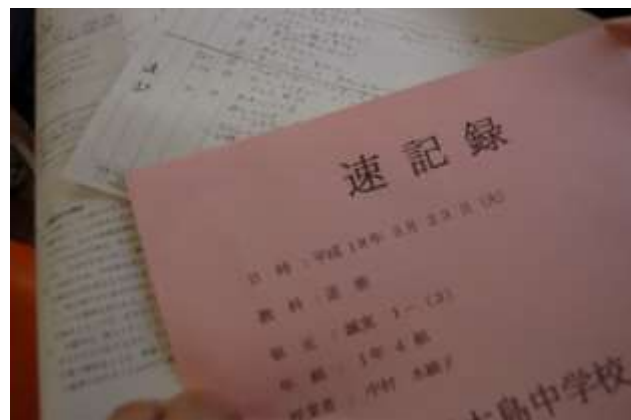


観察記録



速記記録





1-2 授業研究のパートナー校(3)

- 東海市立富木島中学校、富木島小学校、船島小学校、明倫小学校(教育実践問題支援プロジェクト・深谷孟延教育長)参加型授業研究
- 名古屋市立千鳥丘中学校(清水克博校長)中学校の授業研究
- 尾張旭市立西中学校(臼井隆校長)中学校の授業研究
- 社会科の初志をつらぬく会の先生方の教育実践



香港教育学院でのWALS 盆踊り

2-1 授業研究の起源(1)

○ 問いの背景

- 1) 日本の授業研究が**LESSON STUDY**としてアメリカで受容され、北アメリカ、アジア、ヨーロッパに普及してきた。
- 2) 世界授業研究国際学会(WALS): **LESSON STUDY**は、日本の授業研究を基礎とするが、明治時代にアメリカ人によって始められたので、源流はアメリカにある、という主張。
- 3) 授業研究の起源が論者によって異なる。



Lesson Study を紹介した吉田誠氏



新城小学校の授業研究の調査にきたアメリカの研究者



日本の授業研究の心を紹介し、授業研究の展開したC.Lewis氏

2-1 授業研究の起源(2)

授業研究の様々な起源

- 「日本における授業研究の起源は、1920年代までさかのぼることができる」(豊田、2009、12) : 1930年に小学校教師(訓導)となり、第2回北日本訓導協議会に参加した宮崎典男の事例
- 「米国に留学し、ペスタロッチ主義の理論と方法を学んだ高嶺秀夫らの元で、東京師範学校訓導の若林虎三郎、白井毅によって著された『改正教授法』(1883)が授業改造のモデルとして普及し、授業における方法上の原則、発問の心得、教案の形式、批評の視点が授業法の要として示され、このような教授法書の普及や講習によって、授業研究が広まっていた。」(稲垣、1990、62)

2-1 授業研究の起源(3)

法令による実地授業の規定

- 1883(明治16)年8月改正の『東京師範学校小學師範學科規則』には、他の授業を目撃すなわち参観して、その授業を批評することによって、実地授業は授業の改良を目的としていることが意識されている(東京師範学校、1883、31)。
- 1892(明治25)年7月11日の文部省令第8号「實地授業ニ就キテハ各學科目ノ教員常ニ巡視シテ其適否ヲ批評シ又時々自ラ教授シテ之カ模範ヲ示スヘシ」

2-2 授業研究の性格(1)

- 日本の授業研究は教育実習ではなく、その特徴は、授業に焦点をあてた教師の間の協働研究にある。ジーン・ウルフと秋田喜代美は、アクションリサーチと授業研究を比較し、授業研究の担い手と内容の特徴は次の点にあるとしている(ウルフ&秋田。2009,28)。
- ①研究主体が学校である。
- ②学校の文化として年間計画に組み込まれている。

2-2 授業研究の性格(2)

- ③問題の所有者は学校目標のもとづくチームである。
- ④研究への参加が義務づけられている。
- ⑤仮説検証型の研究ではなく、仮説探索型の研究である。
- ⑥質的データを主に使用する。
- ⑦ビデオとフィールドノートによる観察方法をとる。
- ⑧談話様式としてはナラティブモードが多く使用される。
- ⑨学校の研究紀要で成果が公表される。
- ⑩学校文化に価値づけられ、重視される。

2-3 授業研究の段階

○ A 授業研究萌芽段階

★段階1 指導者の授業参観がある。

★段階2 指導者の授業参観があり、かつ批評がなされる。

★段階3 指導者と同僚の参観があり、かつ批評が合同でなされる。

○ B 授業研究段階

★段階4 授業が外に開放され、同僚の参観があり、かつ批評が合同でなされ、改善がなされる。

★段階5 授業研究が協動でなされる。すなわち、研究授業が開放され、多くの教員による授業計画や観察と資料収集が協動でなされ、その後、批評がなされ、改善がなされる。

2-4 授業研究の起源：結論

- 結論：明治期は実地授業と呼ばれていた教育実習が主体であっても、授業研究の要素を含んでいるものを授業研究萌芽段階とし、同僚間でなされる協動的な授業研究を授業研究段階として、仮説的に段階を設定すると、
- 1) 第2段階の授業研究がすでに1874(明治7)年以降には成立していた可能性がある、
- 2) 1897(明治20)年以降には、第4段階の授業研究が実施されていた。
- 日本の授業研究はそれ以降、独自の展開をしてきた。

3-1 授業分析の起源(1)

- 背景:口伝として1950年代に授業分析は名古屋大学で始まったと言われてきた。
- 帝塚山学園授業研究所の発行した著書の日比裕が担当した章:そこでは、重松鷹泰が「自ら命名した“授業分析”を提唱したのは1954年」であったと明記してある(日比裕、1978、19)。最初の授業分析の対象として取り上げた授業は、名古屋市立六反小学校2年社会科「おみせやさん」であったと言われている。

3-1 授業分析の起源(2)

- 1959年3月に公刊された『名古屋大學教育學部紀要』第5卷に小川正の執筆担当となっている「授業分析—第一次報告」
- ←名古屋大学教育学部の総合研究「労働と人間形成」の一部門「児童における労働の理解」
- ←1952年に開始された重松鷹泰と上田薫による「小学校社会科の評価」研究

3-2 授業分析の定義(1)



背景1:授業研究が**LESSON STUDIES**として世界で多様に展開されてきている。



背景2:授業分析が①授業研究の持続、②専門職として教師の実践知の創造、③教育学の新しい知の創造を担う授業研究として注目されつつある。



背景3:**LESSON STUDY**(授業研究)の中に**LESSON ANALYSIS**(授業分析)を位置づける必要がある。

3-2 授業分析の定義(2)

ドイツにおける授業研究と授業分析の定義



授業研究(Unterrichtsforschung)は、授業の構造理解に対応して、「制度的な教授学習過程の諸前提、過程、構造、そして成果を学問的に分析すること」(Helmke 2007, 734)



授業分析(Unterrichtsanalyse)は、「一方では教師教育と教師評価の文脈で、他方では経験科学的な授業分析の一部」(Terorth & Tippelt 2007, 727)

3-2 授業分析の定義(3)

- 授業分析は、授業研究の一手法であり、教育実践の事実、すなわち授業における教師と児童生徒の発言、活動、その他、授業を構成している諸現象を、できるだけ詳細に観察・記録し、その記録に基づいて授業を構成している諸要因の関連、学習者の思考過程、あるいは教師の意思決定など授業の諸現象の背後にある規則や意味を、実証科学的、社会科学的にあるいは解釈学的など多様な方法によって明らかにしようとする。




日本で開催された国際授業研究会に参加した人々

FFV-310 http://www.eduhk.hk/odp/loconference/1st/

ファイル 編集 表示 お気に入り ツール ヘルプ

戻る 進む 検索 お気に入り 212 blocked Check AutoLink Options Sarkar Arani

The 1st Annual Conference on Learning Study



Date: 3 December, 2005 (Saturday)
Time: 09:00 - 16:00
Venue: Lecture Hall of C-LP-11, TaiPo Campus
The Hong Kong Institute of Education (HKIEd)

Organizer: The Hong Kong Institute of Education
Centre for Learning Study And School Partnership (CLASP), HKIEd

Programme

Online Registration

Registration



CLASP

アドレス http://www.eduhk.hk/odp/loconference/programme.htm

ファイル 編集 表示 お気に入り ツール ヘルプ

戻る 進む 検索 お気に入り 212 blocked Check AutoLink Options Sarkar Arani

Programme

The 2nd Annual Conference on Learning Study

Programme rundown (tentative only)

Day 2 - Public
Date: 1 December 2006 (Friday)
Venue: Lecture Hall C-LP-11, TaiPo Campus, HKIEd

Time	Session
9:00 - 9:15	Welcoming Speech
9:15 - 10:30	Research Lessons in China Professor Hong Ji Shanghai Academy of Educational Sciences, China
10:30 - 10:45	Break
10:45 - 11:45	Learning Study in Hong Kong (with cases analysis) Dr Lo Man Ling Head of Centre for Learning Study And School Partnership (CLASP), HKIEd
11:45 - 13:00	Lunch and tour of Learning Study exhibition
13:00 - 14:15	Lesson Study in Japan Professor Masumi Matsuo & Dr Mohammad Reza Sarkar Arani Graduate School of Education & Human Development, Nagoya University, Japan
14:15 - 15:30	Lesson Study in Singapore Associate Professor Phyllis Wan, Tan Yee and Dr Kuan Wenbin

ページが表示されました

インターネット



3-3 授業分析の位置と立場(1)

世界の授業研究

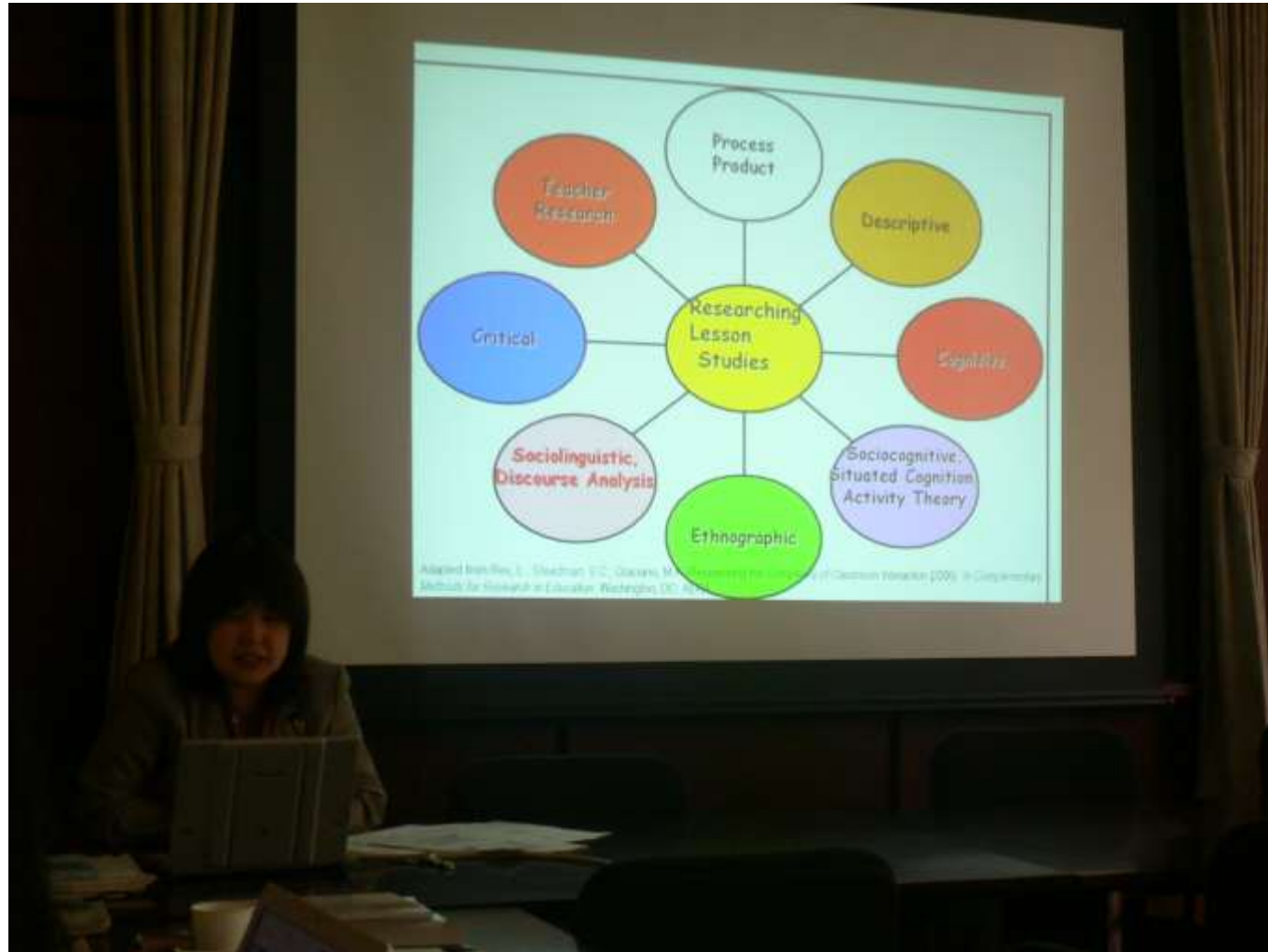
- **Brunei:** Teacher Education & Teacher Training
- **Singapore:** Changes school culture and teachers mindset
- **Hong Kong:** Teaching Analysis & Lesson Observation (Learning Study)
- **Thailand:** Improving Learning Process & Quality of Classroom
- **UK:** From “add-on” activity to standard operation of school
- **Sweden:** Research- & Theory-based teachers’ practice (variation theory)
- **USA:** Collegial Learning; Professional Learning Quality
- **China:** National teacher training programme; teacher capacity assessment
- **Indonesia:** Self initiative and Expanding Effective Teaching Methods;
JICA & APEC projects
- **Japan:**
 - Student:** Learning Community
 - Teacher:** Professional Learning
 - Researcher:** Discourse Analysis & Lesson Analysis

3-3 授業分析の位置と立場(2)

名古屋大学の授業分析の位置

- 1) 手法として、①誌学的手法、②理学的手法、③教育工学的手法、④文化人類学的手法(加藤、1982)。
- 2) 授業記録の方法、授業記録の対象、授業分析の視点など授業研究の特徴の視点から各個人の授業研究を分類し、その系譜を明らかにする方法である(三橋,2003)。日本独自の授業研究。
- 3) 授業内の相互作用に対する学問的アプローチを明らかにする方法である。レックス等は、授業の相互作用に関する英文の文献をレビューし、授業研究を7のアプローチに分類している(REX,2006)。ジーン・ウルフ、秋田喜代美は、これに記述的アプローチを加えて、表1の8のアプローチに区分している(ウルフ・秋田、2008)。記述的アプローチに位置づけられている。

授業研究の研究(秋田)



3-3 授業分析の位置と立場(3)

THREE TYPES OF LESSON STUDY

Professional Development



Academic Knowledge^{matoba}

3-3 参考（１）香港でのシンポジウム2010

CONCLUDING REMARKS



Development of Tools to
Promote Lesson Study



Collaboration Between the
Teachers and the Researchers



Discovery of Evidence



Speaking of One's Own
Practice in One's Own Words



3-3 参考（2）香港でのシンポジウム2010 CONCLUDING REMARKS(2)



Fostering of Leaders to Lead
the Learning Organization



Positioning Lesson Analysis
within Lesson Study



Formation of the
Epistemology to Grasp the
Lessons



3-3 授業分析の位置と立場(4)

- 佐藤が批判した授業過程の法則をみる立場とは異なる。同時に授業の科学的理論的研究の専門家は教育研究者であるというようには実践研究と理論研究を位置づけていない。名古屋大学の教育方法研究室において展開された授業分析は、分析の視点を客観的に明示し、それを共有して、分析し、そして授業を診断する方法ではない。この研究集団は、まず、事実から出発することから授業分析を始めている。教育実践における事実としては、その当時、次のことが想定されていた(重松、22-23)。

3-3 授業分析の位置と立場(5)

教育実践における事実

- ① 子どもたちの状況:ある教育実践のはじまるまでの子どもたちの状況、それが一段落したときの状況、両者の間の変化の過程。
- ② 教師の状況:教師の教育観、性格、優れた能力と劣った能力、それらの変化する傾向。
- ③ その実践をとりまいている学校や地域社会の状況:地域社会はこれを取りまく国際情勢に至るまでのものが問題。
- ④ 実践そのものの展開状況:何を狙いどのような手段を用い、どのような順序で、どれほどの機動性をもって、展開していったか。

3-3 授業分析の位置と立場(6)

授業分析と理論形成

- 事実を即することは、実際を詳細に記述すれば、現場の研究者の責任は終わってしまうという考えではないと述べる。事実を明らかにする努力をしないで、独的な理論を打ち立てて、それをふりまわすことを排斥する。教育学は教育という複雑な現象を理論づけるには幼稚な段階であることを重松自身が自覚し、教師が自分の研究を理論づけようとするときに、既成の理論にたよることを戒める。そして次のように述べる(同)。

現場の教育研究者は、むしろ自分自身の事実をとらえている立場を反省しながら、その事実についての論理的な考察を試み、むしろ教育学の基礎を提供するという姿勢をとらなければならない。

3-3 授業分析の位置と立場(7)

授業分析を基礎とした授業研究の課題(1)

● 授業研究は、教育学の視点からみると、教育学の概念を再発見ないし発見する場であると同時に教育学の概念の内実を発見する場である(教育学的課題)。

● 授業実践者にとっては、授業研究は授業を通して直面している諸問題の解決を試み、明日の教育実践の可能性を構築する場である(教育実践的課題)。

● 教育実践研究の視点からみると、授業研究は実践場面における困難性を自覚的に把握し、より明確にとらえなおす場である(教育実践研究の課題)。

3-3 授業分析の位置と立場(8)

授業分析を基礎とした授業研究の課題(2)

● 研究手法の視点からみると、授業研究は実践的な研究を土台にした研究手法やツールの開発と展開の場である(研究手法の開発課題)。

● 授業研究は、この4の課題を内に含み込みつつ4の課題領域へ発信する教師と研究者による開かれた知と実践の協同研究である(開かれた知の形成の課題)。

● 授業分析を基礎とした授業研究は、授業の可能性を実現する記述形式を解明することを理論的課題としている(理論的課題)。

3-4 授業分析のステップ

- 学校での校内研修としての授業研究が形骸化してきた現状を克服するために参加型授業研究会の分析手順を的場、柴田で提案してきた（名古屋大学・東海市教育委員会、2004）。これらを参考に、実際に試みている授業分析の手順は次の10段階からなる（配付資料参考）。
- 第1段階：問題の発掘と共有
授業分析を開始する契機は、教師と研究者の問題の把握と問題解決の精神である。
- 第8段階：分析テーマにもとづく資料の整理（量的分析、個票、など）

3-5 記述言語としての中間項の必要性(1) 発言の解釈

- 授業「もよう」 正美50:「半分の富士山」のなかに「ピラミッド」は8つはいる。(この発言の後、実際に「半分の富士山」のなかに「ピラミッド」を8つあてはめる)

matoba

解 釈

これまでの知識の構造の発見が、他の図形の関係に関する直観的思考を可能にする。その直観的思考と先に発見された分析的操作の応用を通して、新しい知識の構造が発見される。

子どものつけた名前

43

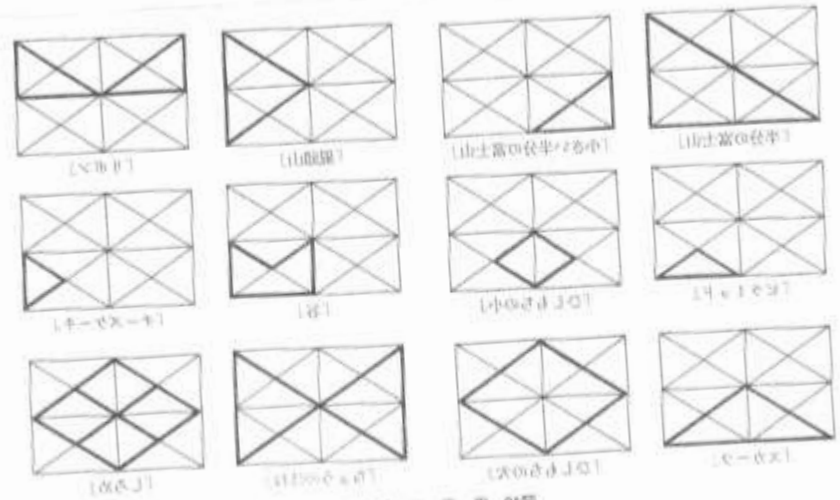
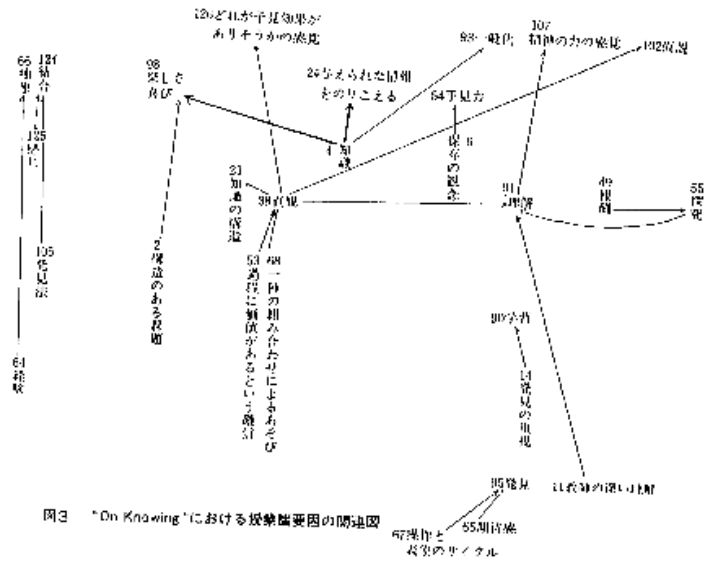
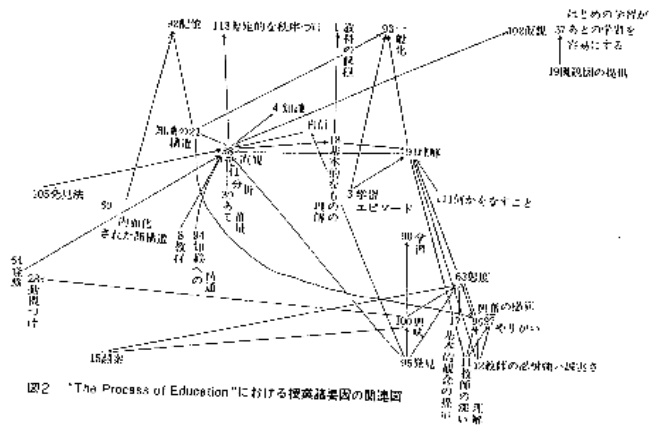


図 3-10 図 3-11

THE PROCESS OF EDUCATION

ON KNOWING



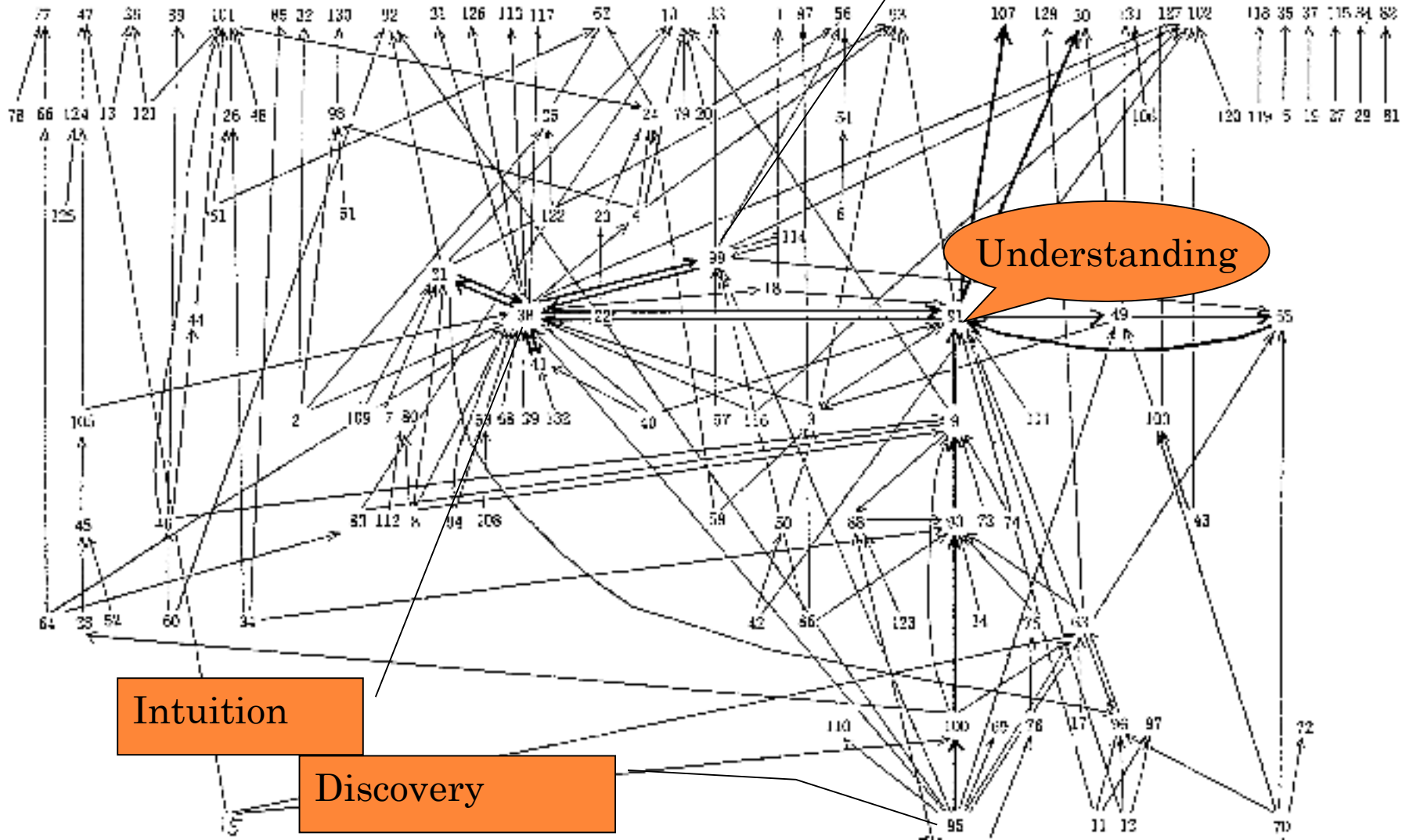
BRUNER

Self Confidence

Understanding

Intuition

Discovery

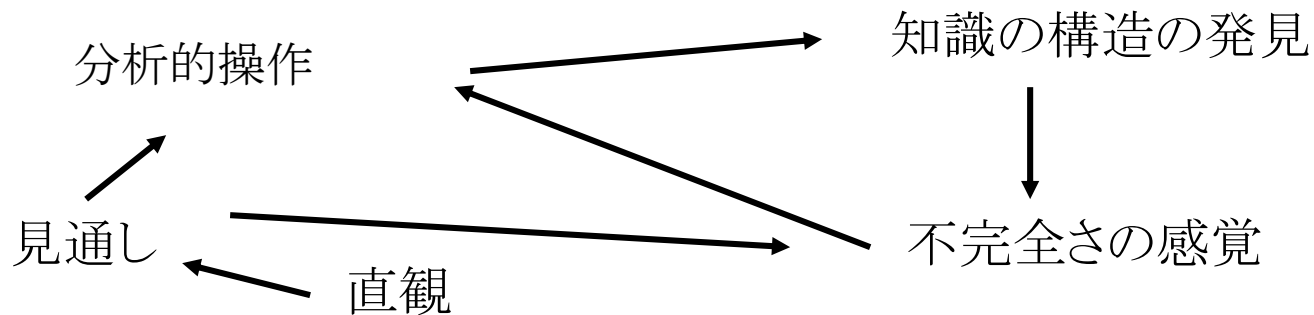


3-5 記述言語としての中間項の必要性(2) 理論との照応

これまでの知識の構造の発見が、他の図形に関する直観的思考を可能にする。その直観的思考と先に発見された分析的操作の応用を通して、新しい知識の構造が発見される。

matoba

intuition - to carry - sense of incompleteness
(the feeling that there is something more to be done)



3-5 記述言語としての中間項の必要性(3)

中間項の例

正美94:井谷さんのぶん(和紙)は、びりびりって破ると、これ(せんい)がその破いた方向に(たれる)、あの、和紙のせんいがたれる。

正美94:by(びりびりって破る) > > > [井谷さんの和紙](せんい・破いた方向にたれる)(和紙のせんい・たれる)

by(A) > > > [B](C):Aという行為によってBという事物のCという性質、概念活動が明らかになる。

[A](B);Aという事物のBという性質、概念、活動

3-5 記述言語としての中間項の必要性(3)

中間項と授業諸要因

- 正美94:by(びりびりって破る) > > > [井谷さんの和紙]
(せんい・破いた方向にたれる)

びりびりって破るという
行為

井谷さんの和紙

||

せんい

破いた方向にた
れる

破るという実験的行為

繊維が破いた方向にたれる
ことを発見

3-5 記述言語としての中間項の必要性(4) 中間項の可能性(1)



第1に、記述形式を開発し、その形式に解釈を明示することにより、1)解釈の飛躍の程度と2)参照性を担保できる可能性がある。



第2に、45個の記号を開発してきた研究を発展させ、1)語相互の関係の規定性と明示性を有する記述形式の構造化によって、2)形式に多様な解釈を明示化できる可能性がある。

3-5 記述言語としての中間項の必要性(5) 中間項の可能性(2)

記述言語の開発研究は、

1)語と語の関係を捨象しないで、

2)記号によって関係を確定し(関係性の確定という共通の基礎)、

3)解釈者の認識(エピステーメ)を明らかにすること(解釈の背後にある認識の批判)によって、

4)安定した命名のゆらぎの幅(解釈による飛躍)を許容し、

5)開かれた知の体系の可能性を探求できるところにある。

4-1 授業分析の課題と可能性(1)



第1には、仮説形成に関する研究方法の研究とアブダクションの関係の解明である。



第2は、教室内における教科教育の授業だけでなく、活動を含む授業の記録方法の開発、および臨床的な問題行動をとらえる記録方法の開発が必要とされている。



第3は、パラ言語情報をラベリングする基準であるイントネーション単位、ターン構成単位、統語構造にもとづく単位と記号による表記との対応関係の検証研究である。

4-1 授業分析の課題と可能性(2)



第4は、すでに共同研究者の柴田によって一定の成果があげられているが、授業分析における質的な解釈と量的分析の関係と統合に関する実証研究である。例:分節わけ。A)文章の解釈、B)特定の語彙の頻度→分節において交わされた語彙と対応関係




第5は、どのようなプロトコルマテリアルでもって教育現象を切り取るか(測定、録画、録音)というツールの開発である。



第6は、カンファレンス的手法など多観点的な解釈と授業分析の結合の問題である。



第7は、授業研究における解釈学の位置の問題である。

A photograph of a winter scene in a mountainous region. A paved path leads through deep snowdrifts towards a cluster of wooden houses with snow-covered roofs. The background shows a steep, snow-covered hillside under a clear blue sky, with a line of dark evergreen trees at the top. The text is overlaid in the upper left quadrant.

最終講義にご出席くださり、ありがとうございました。長い間 お世話になりました。良き同僚、友人、共同研究者に恵まれ、感謝です。